長崎大学 e ラーニング：A コース　　報告：令和 5 年　3 月 31 日

① 知的発達症、限局性学習症　講師：吉田ゆり

＜知的発達症とは＞

発達期に発症し、概念的、社会的、および実用的な領域における知的機能と適応機能両面の欠陥を含む障害。

基準 A：全般的知能の欠陥
基準 B：日常の適応機能の障害
基準 C：発症は発達期（18 歳以下）の間

・診断は、臨床的評価、知的機能および適応機能の標準化された検査に基づく
・IQ の値ではなく適応機能に基づいて定義される

＜知的発達症の概要＞

・知能検査：70±5（65～75）以下
・有病率：1000 人中 6 人程度
・合併、併存しやすい代表的な障害：自閉スペクトラム症、ダウン症

＜限局性学習症＞

DSM－Ⅳ－TR → DSM－ 5

特異性学習障害
・読字障害
・書字障害
・算数障害

→

限局性学習症/限局性学習障害
・読み（音読・読解）の困難
・書き（綴り・作文）の困難
・算数（数の意味、数の事実、計算の困難）

認知面の障害である事を強調⇒〇情報の知覚、処理に特異的な欠陥と位置づけ。
科学的に・実証的に指導し、その変化を確認することを学校や教員に要求している
⇒困難を標的にした介入が提供されているにも関わらず、症状が存在し、少なくとも 6 か月間持続している。
幼稚園・保育園の段階での症状に言及⇒〇就学前の状況として注意・言語・運動技能の遅れが先行してみられ、持続することがあることを明記した。

＜限局性学習症の主な特性＞
・聞く：聞き間違い、聞き漏らし、手段での聞き取りの困難さ
・話す：適切な速さでの会話の困難、早口、言葉に詰まる
・読む：読み飛ばし、文章の要点理解の困難さ
・書く：文字の大きさ、位置、バランスの悪さ、鏡文字
・計算：学年相応の数の意味や表し方の理解の困難さ
・推論する能力：学年相応の量の比較、量を表す単位の理解の困難さ　等

＜併存する症状＞
・空間認知の困難
・粗大運動の困難
・微細運動の困難
・ボディイメージに関わる事
・不注意

＜学習障害理解の困難さ＞
１）学力不振なのか、学習障害なのか

２）学習障害とは、併存障害だけでは診断されない

３）個人内差は大きいが、期待する発達水準からみて学力が遅れているとは言えない子ども⇒現在は診断がつきにくい